

8月1日ワシントン空港を發つてパッファロー經由オ
タワへ向つた。丁度3カ月の契約が終了したわけであ
る。生憎朝からのドシヤ降りの雨であつた。Dr.
Markowitzは私を下宿まで車で迎えて空港へ運んでくれ
た。これから2週間にわたる私の帰路旅行を気づかっ
て、こまごまとした注意を与えてくれた。翌日のひる頃
の飛行機で、彼もIUGGのCRCM(近世地殻変動委員
会)へ出席のためヘルシンキへ出發する直前であつた。
この會議のための準備や旅行日程のほか、私の旅行日程
の一切も彼が引受けて作つてくれた。不斷でさえ忙しい
彼の生活にさらに最大限の忙しさを加えていたらしく、
この頃はさすがの彼も少し疲れをみせているようであつ

た。

今度の私の滞りはDr. Markowitzへかけ合つて下さ
った東京天文台の虎尾(正久)さんのご尽力による。往
復旅費と滞在費は一切海軍天文台が負担してくれた。3
カ月の短期間ではあつたが、貴重な勉強をさせて頂い
た。われわれの東京天文台での仕事を外側から客観的に
観察できたわけである。ワシントン滞在中や、帰路オタ
ワ、ボルダー、フラグスタフなど各地でも大勢の人々の
厚意を受けた。関連のあつた多くの人々に感謝をささげ
ながら筆を擱く。まとまりのない雑文をお許し頂きた
い。

新刊紹介

Sdail 著, Pešek 画, 島村福太郎訳

原色 月と惑星

岩崎書店發行, B4変形版, 見開き図版40, 184ページ, 4800円

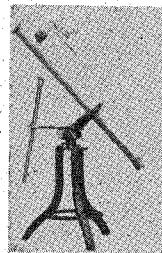
現在のように交通が発達した時代でも、海外旅行談は
私達の興味を引き、旅行者の撮影したカラースライドは、
それがまだ見ぬ国であろうとなかろうと私達の胸の中を
かきたてる。月ロケット、惑星ロケットによって宇宙旅
行の門戸が現在開かれはじめたとはいうものの、まだわ
たしたちが訪れたことのない月や惑星の世界は、鎖国時
代の人々が外国の様子を思ったのと全く同じ思いを私た
ちにいだかせる。しかし鎖国時代の世界観とはちがい、
私達は17世紀初期以来の望遠鏡観察にはじまる他天体の
世界の研究の集積を持っている。これら300年以上に達
する天文学の成果に基いてこれらの世界像を具体的に示
したものが本書の主要部を占める見開き大形の図版であ
る。その多くのものは4色から16色刷りで、印刷製本は
原本の發行所が當っており本書の生命ともいふべきその
印刷は完全といえよう。

巻頭の解説文で太陽系の諸天体の世界が要約して、次
に図版とその説明がある。月に15図、金星に5図、水星
に3図、火星に5図、木星に3図、土星に4図、天王星
海王星、冥王星にそれぞれ1図つづつとその他2図であ
り、天文画家としてしられたPešek氏の画筆によりこ
れらの世界がわれわれ見るものにせまってくる。

本書は天文学の研究書ではない。しかしこれは絵の形
に書きかえられた太陽系天文学解説書であると考えら
れ、見るものに強烈の印象を与える。したがってその持
つ教育効果は大きい。天文学に通じた人にとってはこの
書は太陽系天体に対する理解度の競走相手として、つき
ない興味の源泉であり、教育の現場に対しては有力な教

材となるものと思う。個人、図書館学校その他に広く備
えつけられ、利用されるべきものと思われる。

最後に一言つけ加えておきたいことがある。それは本
書の取り扱っている問題は実は日進月歩している方面で
ある。月の世界も惑星の世界もまだ私達は訪れたことは
ない。しかし人間の作ったロケットは月に到着し、また
火星に接近してその表面の様子を電送している。したが
って本書の図版のあるものは近い将来改変を余儀なくさ
れるであろう。それは訳者も述べておられるように「本



15cm 経緯台

厳密なる精度・安価な値段

ニュートン式拋物面鏡(斜鏡付き)

8cm~30cm(アルミメッキすみ)

カセグレン式拋物鏡(補鏡付き)

20cm~30cm(アルミメッキすみ)

接眼鏡(全面コーティングすみ)

オルソスコファイック5m/m, 9m/m

その他ケルナー、ミッテンハイゲ
ン各種。

屈折二枚合成アクロマチック対物レンズ(光軸修正

枠付き)有効口径(8cm以下製作中止)8cm,

9cm, 10cm, 11.5cm, 15cm, 各口径 $f=1:15\sim 1:11$

接眼鏡:ラックピニオン二段式40m/m接眼鏡兼用

架台:全周ウオーム式。

上下微動:ネジに遊びのない独自の
設計。

脚:振動のないアルミニウム鋳物
製。

カタログ30円切手
(誌名記入)

完成反射望遠鏡各種

有限
会社

足立光学レンズ製作所

東京都武蔵野市関前5丁目1,185

国鉄中央線武蔵境駅下車バス桜橋停降

TEL 武蔵野(0422)(51)8614番

振替口座東京41970番

書の光栄ある運命」である。その時本書の原著は改変されるであろうが、この訳書も遅滞なく訂正されることを訳者と出版者にお願いしておきたい。

天体アルバム 誠文堂新光社発行、B5判、124ページ、450円

誠文堂新光社は学校天文台や、アマチュア天文家が撮影した天体写真を数多く掲載した雑誌「天文ガイド」を発行していることは多くの本会員諸氏も御存知のことと思う。本書はその12月臨時増刊という形で、ウィルソン山・パロマ山天文台撮影の天体写真を収録している。写真の一つ一つにはその所在を示す案内星図が示してある。巻末には高瀬文志郎氏が種々な天体について要領よく解

説されており、また冨田弘一郎氏の天体望遠鏡と天体写真の発達という一文があって、ここに集められた写真の持つ意義が明らかにされている。手頃な天体写真集として本会会員諸氏に御すすめしたい。(広瀬)

(8頁よりつづく)

この小文に述べたX線天文学は現在の段階にたったものであるが、絶え間ない研究がすぐまた書きかえるべき箇所を作ることを期待して筆を置く。

なおX線天文学についてもっと詳しいことを知りたい方は S. Hayakawa, M. Matsuoka and D. Sugimoto, Space Science Reviews (印刷中) を参照されたい。

雑 報

非常に小さな凝縮矮星雲 星雲の性質をより深く究めるため、200インチ望遠鏡による、特異星雲の系統的写真観測プログラムが1961年より開始され、昨年完了した。この結果は、「特異星雲写真集」として発表されるはずである。この中には、明るさの割には非常に小さな

星雲も含まれているが、そのひとつについて、アーブが報告している。(Arp, H., Ap. J. 142, 402, 1965)

この天体は、 $\alpha = 11^{\text{h}}17^{\text{m}}6$, $\delta = +51^{\circ}41'$ (1965), 見かけの写真等級それぞれ $17^{\text{m}}8$, $17^{\text{m}}9$, 1:1 はなれた二重星状に写真ではうつっている。主な輝線(吸収線は見つかっていない)の赤方変移より求めた後退速度は、乙女座星雲団と同程度の 1326 km/sec で、星雲と考えられる。この視線速度から距離を決めると、 13 Mpc となり、したがって絶対写真等級はそれぞれ、 $-12^{\text{m}}7$, $-12^{\text{m}}8$, 実直径はなんと 70 pc という。極めて小さい凝縮した星雲である。

図は代表的いくつかの星雲●、および球状星団○についての光度—直径関係を示したもので、この星雲は◎の位置にプロットされる。球状星団と同程度の大きさで、これまで矮星雲($\sim M_{\text{pg}} = -16\text{m}$)といわれているものより10倍暗く、並通の星雲の列から左にはづれ、むしろツウイッキーの密な星雲●にならびそうである。

このような凝縮矮星雲が、長い宇宙年令(10^{10} 年)にわたって、輝線を示すべくガスを励起しつづけた機構は何か? また初期宇宙の小さな密度変動が、現在まで如何にして凝縮をつづけることができたか? 等興味ある問題も生じてくる。そして図の星雲—球状星団間の領域に分布する矮星雲の、存在および発見可能性のカナメとも考えられるこの矮星雲は、さらに詳しく観測される必要がある。

